上演７ ２０２５年7月２７日（日）２校目 北海道ブロック 北海道苫小牧東高等学校 「やっぱり、こっちがいい」	第４９回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第７１回全国高等学校演劇大会 講評文 生徒講評委員会　担当委員 共愛学園高等学校（群馬） 木村　和芭

私たち高校生の日常で良く見られる光景が等身大で描かれているだけでなく、男女の細かい心理描写も巧みに描かれていて、とても共感できる部分が多かった。

舞台上で描かれている男子と女子の会話はストレートに高校生の私たちと重なった。「こんな女子見たことあるな」「私もそういう生々しい会話したことあるな」という声が講評委員の中からも挙がった。そういった共感の嵐となった背景には、ただ単に高校生の日常を切り取ったセリフだけでなく、コメディ要素が散りばめられていたところにも、見ている人を惹きつける魅力があったと思う。店員さんと生徒のまったく合わないチグハグな会話、「paypay」や「back number」など今の流行を取り入れることで、違和感なく没入することができたのではないだろうか。

劇中では、二組の恋愛が中心に描かれており、そのうちの一組では価値観の違いや心のすれ違いによって起きるそれぞれの思いが繊細に描かれていた。『なんか違う』という一人の価値観が原因で振られた長谷川、そして、その長谷川のことがまだ好きでヨリを戻したいと思っている葵。皆には『もう好きじゃない』と言いながらも、密かに彼を思う気持ちを見て、甘酸っぱい感情で満たされた。他にも、舞台上で価値観の違いについて描かれていた場面がもう一つあった。それは、アイドルのスキャンダルだ。「好き勝手想像して裏切られた。がっかりした。」というセリフには、私たちが一面的な事実を自分の都合のいいように受け取り、それについてああでもないこうでもないと話を膨らませてしまう危険性をはらんでいることを痛感させられたシーンだった。見失いがちなことだからこそ、しっかり考えていかないといけないと感じた。

シンプルな舞台装置でありながら、場転を効果的に見せる作用もあり、その使い方に思わず、その手があったかと思わせてくれた。また、時を戻す演技は同じ演劇部の目線から見ると高度なテクニックを駆使していて、思わず舌を巻いた。

特に大きな出来事が起こるわけでないが、日常の中にドラマがある。何気ない会話の中にしれっと紛れ込まれている言葉、根も葉もない噂に翻弄され、自分の視点だけで、話を進めてしまう怖さがあるといった声が講評委員からも挙がった。人それぞれ価値観は違って、自分の価値観を人に押し付けても何も良いことはない。真実と事実は別物として考えて行かなければいけないことを学ぶことの出来た作品だった。